

氏 名 (本籍) 丁 怡萌 (中国)

学 位 の 種 類 博士 (学術)

学 位 記 番 号 甲第 71 号

学 位 授 与 の 日 付 平成 26 年 3 月 20 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

学 位 論 文 題 目 “戏中戏” 文本的嵌套式重构研究

論 文 審 査 委 員 主査 愛知大学教授 黄 英 哲

副査 愛知大学教授 松 岡 正 子

副査 愛知大学教授 薛 鳴

“戏中戏”文本的嵌套式重构研究——论文摘要

丁怡萌

文献综述分为三个部分，“经典重构”是近年来学界关注的热点之一，但概念内涵分歧较多。①捋清“重构”这一概念纷繁芜杂的现状，在区别与其他重构文本类型不同的基础上，提出本文所要讨论一类文本的特征；②综述嵌套结构的研究现状，将不同的套层类型归类，体现出本文所要讨论的一类文本与其他嵌套结构文本的不同之处。通过这两组比对，更准确地界定本论文的研究对象，使其特殊性凸显出来，提出一种“戏中戏”形式的“嵌套重构”。③跨媒介互文的研究现状为本论文将电影、小说、戏剧的不同文体置于同一平面上进行讨论的可行性提供了理论基础。

论文主体部分首先收集、梳理嵌套重构文本，兼其所对应经典文本，作为分析的素材：

表 1：“戏中戏”文本举隅

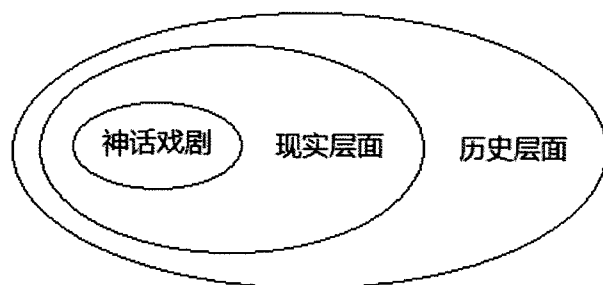
	京剧文本	重构文本	再创作者	经典角色	重构角色	重构文本主题
中国作品	①霸王别姬(京)	霸王别姬 1993	陈凯歌	虞姬	程蝶衣	历史的暴力循环
	②钟馗嫁妹(京)	人·鬼·情 1988	黄蜀芹	钟馗	裴艳玲	女性的奋斗与拯救
	③白蛇传(京)	白蛇 2001	严歌苓	白蛇	孙丽坤	文革中的受难
	④牡丹亭(昆)	游园惊梦 1966	白先勇	杜丽娘	蓝田玉	落魄失魂抚今追昔
	⑤嫦娥奔月(京)	青衣 1999	毕飞宇	嫦娥	筱燕秋	文革后惊醒的伤痛
	⑥梁祝(越)	舞台姐妹 1964	谢晋	梁兄、英台	春花、月红	姐妹分道扬镳
	⑦红梅记(粤)	情谜 2012	黎妙雪	慧娘、昭容	惠香、惠宝	孪生姐妹间的嫉妒
	⑧林冲夜奔(昆)	夜奔 2000	徐立功	林冲	林冲、少东	游子戏子颠沛流离
外国作品	①天鹅湖(芭蕾)	黑天鹅 2010	阿罗诺夫	黑、白天鹅	妮娜	极端性格间的挣扎
	②红舞鞋(芭蕾)	红菱艳 1948	鲍威尔	珈伦	维基·维基	艺术追求不停歇
	③达洛卫夫人	时时刻刻 2001	坎宁安	克拉丽莎	三个女人	女性的价值独立
	④米诺陶迷宫	曾几何时	布托[法]	忒修斯	雅克雷维尔	邪恶之城

上述几组中外作品序列中的两个叙事层面形似神似，是以巧妙的文学手法，对经典文学作品进行再加工，创作出的崭新作品，其共性值得深入分析，本论文发掘上述文本共性，按照“分析研究现状（表 1）→收集整理文本（表 2）→界定研究对象（嵌套重构）→对比分析文本（叙事学）→做出理论解释”的步骤来考察“戏中戏”文本中的嵌套结构。借用叙事学理论，为阐释该类型文本探索一个理论框架。

上篇对每一文本的分析都遵循一下几个步骤，第一，叙述故事原型或神话原型，这个故事怎样通过舞台剧形式呈现出来，作为主文本的暗线存在；第二，叙述再创作文本中的现实故事，或曰文本的明线；第三，考察分析一明一暗两条线索的重叠之处，暗线故事（内部叙事）是如何潜埋在明线故事（外部叙事）内部，又是如何变异为新的故事，即两文本相同的地方，包括意象与音乐性的重叠；第四，每一部重构文本并未完全再现这一出折子戏，而是依据现实情节的需要彰显其某个情节，舍弃某些情节，或将之拆分后镶嵌，即两文本不同的地方。这就是刘勰“六观说”中的“通变”；第五，考察每个重构文本所发生的真实的历史年代，参考经典文本所处的远古年代，做出比较；第六，分析每个文本明线中的主要人物如何入戏，如何与经典人物重合。

下篇分析归纳这一类型文本的艺术构成机理，剥去每个文本独特的枝枝蔓蔓的情节，找到其共同的主干，分析经典文本与重构文本的关系，经典角色与重构角色的关系。

首先，将这类文本划分为三个叙事层次，由微观到宏观依次是：经典层面、现实层面、历史层面。第一层面关照经典文本，是原始神话戏剧本身，属于语篇内部特征；第二层面是经典故事在现实世界中的复制，是经典在观众/读者的现实生活中之意义和再现。这两个层次是嵌套文本的必须条件，又可称为内部层次与外部层次、虚构层面与现实层面、嵌入叙事与框架叙事。第三层面扩展到历史背景的宏大叙事，历史叙事与经典、现实叙事再次形成同构，三个层次形成嵌套。



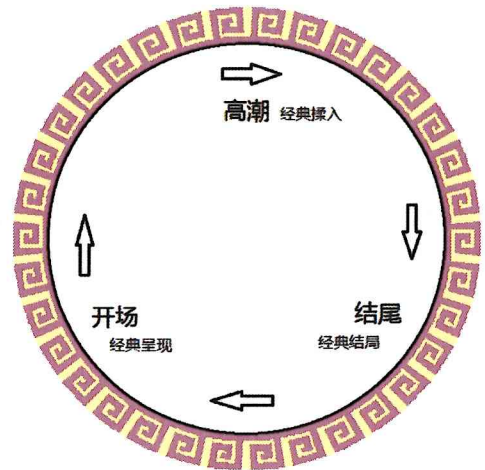
叙事层次级差嵌套结构图

揭示经典文本与嵌套重构文本的关系：新旧文本情节同构，暗线与明线故事在空间上呼应。这一情节设置共同建构了一种基于叙事的想象机制，将两段独立的故事联系起来，引导观众对穿越时空的叙事产生共鸣，使得暗线文本潜移默化地加固了经典主题对观众解读明线文本意义的影响。通过蒙太奇、复调等手段使新旧文本在结构上融为一体；用意识流的手法，打破时空界限，将经典文本的节拍、氛围、旋律“揉”入重构文本的情节中，产生共振，从而实现戏与人生象征式的重叠。在经典与重构文本重叠的瞬间，在唱词中，在舞蹈中，在音乐中构成故事高潮部分。

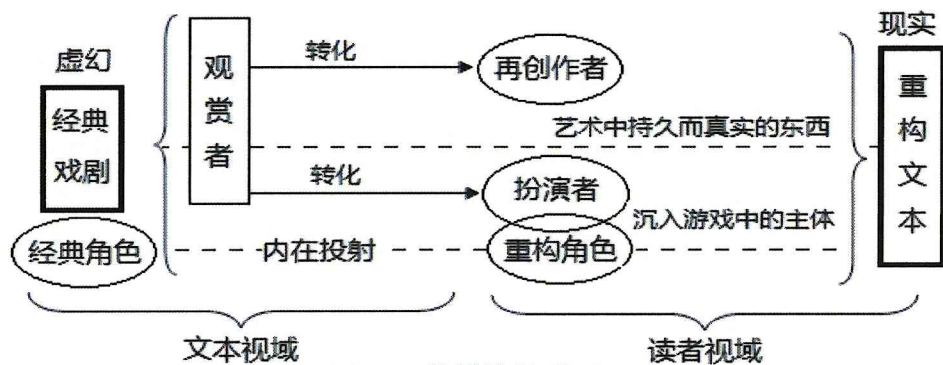
如图所示，重构文本“开头→高潮→结尾”每一个环节都有经典的揉入，使这个圆周构成一个由“回字”嵌套的结构，形成“环状嵌套重构叙事”，这一结

构使起点似乎又回到原点，造成小说内容上形成“命运的轮回”。

戏中戏文本从虚的舞台延伸到现实，现实与戏剧交融，形成虚与实的双重维度书写。本章分为三个大的部分，一是虚幻的舞台与现实的相交，以及二者融合的场域，即后舞台、后花园；二是虚实相交的意象重叠所产生的作用；三是以虚幻戏剧的音乐引发现实人物的情思。这三个部分共同构成了虚实书写相互指涉，显现出舞台与现实之间的张力。



考察经典角色与重构角色的关系，依照“还魂→复活→投射→失魂→死/疯”分析重构文本中角色的发展脉络。重构角色均在戏剧中“扮演”经典角色，扮演者通过移情，将经典角色的感情内在化，经典角色的精神之光向内投射进自己的幻想中。重构角色将自己指认为经典角色，经典角色是重构角色在现实中的延伸与“投射”，重构角色与经典角色亦完成相同的结局。



结篇提取艺术的精髓。在挖掘众文本共性的基础上，以程式化的理性建立一个“范式”(module)，这一范式与共性中有一个内核，成为艺术生命载体。以伽达默尔的“游戏(Spiel)理论”中几个重要的概念解读“嵌套重构”文本：一，经典角色对重构角色的投射，使重构角色成为“沉入游戏中的主体”；二，重构文本自身便迫使经典戏剧的敞开，打破第四堵墙，应和“游戏对观众的敞开”；三，文本序列中共通的艺术精神，艺术内核，即为“持久而真实的东西”。这三个概念可以贴切地描述“戏中戏”嵌套重构文本的特征，以阐释重构如何传承经典中永恒的艺术真理。

審査結果の要旨

本論文は上編と下編に分かれている。筆者が「“戯中戯” 文本（劇中劇テキスト）」と呼んで本論に取り上げているのは、中国テキストでは「霸王別姫」、「人・鬼・情」、「白蛇」、「遊園驚夢」などの8部の作品、外国テキストでは「黒天鵝」（原題：Black Swan）、「紅菱艶」（原題：The Red Shoes）、「時時刻刻」（原題：The Hours）、「曾幾何時」（原題：L' emploi du temps）の4部である。上編ではこれら計12部の「“戯中戯” 文本（劇中劇テキスト）」を丁寧に分析し、下編では上編での具体的なテキスト分析をもとに、さらに一步を進んで理論的な分析を行なっている。

本論の評価すべき点は以下の通りである。

1、テーマの先駆性

「重構（翻案）」型テキストを整理し、「重構」について細密に研究を進めている。中でも「嵌套式重構（入れ子構造）」という概念を提示し、「重構」研究に新しい視点を提供している点は評価できる。筆者は「経典（原作、原典）」が「重構（翻案）」によっていかに再生され、いかに「経典」として現出したかを説明しているが、こうした現代社会にとっての「経典」についての考察には意義がある。芸術の実践、創作、鑑賞、研究の面でも参考となる。

2、論文の独創性

（1）研究視点の独創性：

テキスト精読はおおむね鍵となる概念、「嵌套（入れ子構造）」から切り込んでおり、複数のテキストの配列から共通項を抽出し、文学理論を用いて学術的な検討を行なうという手順にのっとり、全体的に系統立っている。この新しい視点と大胆な論究こそが本論のすぐれている点である。

第一に、本論文は系統性や整合性に重点を置いた理論的研究であるが、理論研究は具体的な文学作品から離れてしまうと、内容に乏しい独りよがりな理論に陥ってしまいがちである。このため、筆者は文学理論研究とテキスト分析を極力結合させることにより、文学作品から乖離した空論にならないように十分な目配りをしている。本論文の起点となっているのは、厳正な物語論研究の採用である。

また、この研究分野には早急に補填されるべき空白があるが、本論はそこに切り込んだものとなっている。今までのところ、本論が提示するような「嵌套文本（入れ子構造）」に注目した理論研究はない。国内外の学术界を見渡しても、論文の中で個別作品に言及したものはあるものの、未整理の状態であり、ひとつの型としての呼称はない。こうしたテキストの芸術的構造と美的価値に関する解釈について、今後、本論のような体系的な研究が速やかに進められることを期待したい。本論文は学術的視点が独創的で、物語論の考察方法を用いた独自の理論とオリジナリティをそなえている。

（2）研究方法の独創性：

本論文の上編では、個々の事例とテキストの流れを分析することからはじまり、順次テキストごとに章節を設けて論を展開している。下編ではタイプごとにまとめてテキストの芸術的構造を分析している。そこでは各テキストの枝葉末節はそぎ落とされて、共通する

根幹部分のみが残され、理論的研究を用いた詳細な解釈が加えられている。マクロな視点で全体をまとめるとともにミクロな視点で徹底的な分析がなされている。筆者は「嵌套」と「重構」の核心的概念を詳解することによって研究対象を定義し、それらを「戯中戯嵌套文本」と名づけた。

本論文は何組かの中国と外国の作品の配列のなかから叙述が似ているふたつについても、巧みな文学手法を用いてテキストの配列における共通性を発見している。「分析研究の現状（表1）→テキストの収集整理（表2）→研究対象の定義（「嵌套」と「重構」テキスト）→テキストの比較分析（物語論）→理論的な説明」という順序で“戯中戯（劇中劇）”テキスト内の「嵌套」構造を考察している。十分な材料をもとに、物語論の理論を用いて、該当テキストについてひとつの理論構造を見つけ出すことに成功している。

特に、中国と西欧のテキストをあわせて取り上げて、そこから共通のパターンとストーリーを発掘しようとする試みは意欲的であり、中国と西欧の文学の境界を超えようとする意欲的な試みである。また論文中には、全編にわたって多くの図表が収載されており、特に図については抽象的な概念をうまくイメージ化している。

本論文は確実な専門的基礎と理論研究に裏打ちされており、筆者の独特な視点、ユニークな構想力の高さが良くあらわれている。斬新な学術的視点を提示することで、物語論研究を深化させており、博士学位論文の水準にあるといえる。

ただし、本論文を出版する場合は、以下の点を改善することが望ましい。

1、「文献総述（先行研究とその現状）」部分について：

専門およびそれに隣接する領域についての概要はおおむね先行研究成果を反映したものとなっている。しかし、物語論研究の全体的な現状が十分にとらえきれておらず、論文は自己の構想の範囲を出ていない。「重構（翻案）」、「嵌套（入れ子構造）」、「跨媒質（ミックスメディア）」の三点から論じているものの不徹底の感があるし、分析した個別テキストの原文にはあまり触れていない。上編の各文学テキストの個別研究では、テキストの特徴を表現できているようではあるが、ボリュームが少なすぎる。

2．構成上の問題点：

論文を上下編の構成とし、上編は具体的なテキストの分析、下編は理論分析としている。しかし、個々の文学テキストの調査からはじめると、どうしても個体と部分的研究に限定されてしまい、現象の背後にある法則をまとめることが難しくなる。また、論中ひとつの理論を例証しようとして、12部のテキストの分析を挿入した結果、乱雑にみえ、テキストごとのディテールをうまく説明できていないような印象がある。上下編の構成を選んだことで、かえって上編には理論が不足してしまい、下編は理論のみを論じて面白味に欠けるものとなってしまっている。上下編という二部構成が本論の叙述形式として適しているかどうかは再考の余地があろう。

以上